

富山県現代俳句協会会報

Toyama Prefecture Modern Haiku Association Newsletter

第65号

令和7年
12月31日
発行

富山県現代俳句協会

発行人 高木 昭夫

編集人 河岸 佳子

事務局 吉田 久夫

〒九三二〇一〇二 小矢部市水島七六

TEL 〇七六六六一二七七

令和七年度 富山県現代俳句協会

秋季吟行俳句大会

てのパネルディスカッションを開いた。高点句や気になる句への意見が活発に交わされ、俳句への熱意とこだわりが伝わる有意義な時間となった。
高点句者の表彰式で終了となった。

九月二十八日(日) 秋晴れに恵まれ、今年度の秋季吟行俳句大会を滑川市で開催した。大会会場は滑川市民交流プラザである。吟行地の滑川市は、富山湾に面し立山連峰を一望できる景観に恵まれた所で、江戸時代には宿場町としても栄えた街で、豊富な句材に恵まれた地域である。猛暑の名残で少し日差しが強かったが、皆さん元気にホタルイカミュージアム等の観光地や海岸を歩いたり、屋上から立山連峰を眺めては作句を楽しんだ。

秋季吟行俳句大会入賞作品

天位 街道をいきつ戻りつ秋茜 西 和美
地位 鐘楼へ妻の背を押す萩の風 坂田 直彦
人位 天高し地球が丸く見える風呂 芹田きみ子
入選

秋澄むや酒蔵カフェのカプチーノ 水白 邦子

あいらぶ湯火照りし肌に秋の風 中川 泰信

有磯海よこたう能登に秋入日 中川 泰信

さまのこの残る街道萩の花 宮崎あつ子

句碑の文字なぞれば古刹秋の声 河岸 佳子

干物屋を横切り海へ小鳥来る 高島 詩香

秋澄むや句碑の英語を手でなぞり 吉田 久夫

秋麗 板絵目に沁む酒造跡 宮嶋 隆一

秋日傘さしかけて触る芭蕉句碑 布本美知子

芭蕉句碑令和を跨ぎて秋の風 梅原恵美子

立山を斜めに見上げ破れ案山子 吉田 憲子

作者の思い

天位 街道をいきつ戻りつ秋茜 西 和美

『街道』と耳にすると何故か心が躍る。ここ滑川も、北陸街道の宿場町としての歴史と懐かしさを感じさせてくれる。江戸時代には大名の参勤交代の行列が通行したであろう。街道沿いには、酒屋、鍛冶屋、油屋等の多くの商家が立ち並び、豊漁を喜ぶ人々で活気づいていた様子が目に浮かぶ。時は流れ、道路や生活様式は様変わりしたが、今もかつての滑川宿の賑わいが息づいており、古い町家から齧を結った

富山県現代俳句協会
秋季俳句大会



人が出てきそうである。秋晴れのこの日、訪れる人の道案内をするかのように、秋茜が付かず離れず旋回していたのが印象的であった。

地位 鐘楼へ妻の背を押す萩の風 坂田 直彦

徳城寺の境内へ入ると、坊守らしき女性が「よかったら見て行ってください」と鐘楼の鍵を開けてくれた。いつも押し車に頼っている妻は、今日は杖である。鐘楼の階段を登るのは楽ではない。でもようやく鐘楼の内部を見学させてもらった。鐘楼の一階は多くの仏像、二階には鐘が吊ってあった。終結部の「萩の風」は虚構である。「萩の風」としていたが、会場へ戻り、出句するとき「萩の風」と直したのである。揺れる秋萩はお寺に付きもののような気がしたからである。徳城寺の境内に萩があったかどうかは定かではない。俳句は、自然を借りて自分を詠む詩である。少しきざだが、風が押したということにしたのである。

人位 天高し地球が丸く見える風 芹田きみ子

水不足の後、九月は雨の多い日々だった。現代俳句の吟行会に初めて参加。当日は朝から気持ちのよい天気で、青空を眺めながら会場の滑川市民交流プラザに向かった。五階の風呂は初めてである。海が良く見え、水平線まで見える。

空はとても澄んでいて、すじ雲がところどころにある。天高しと詠んだが講評で季語をもうひとひねりされたら等、指摘を受けた。まだまだ未熟である。五階の風呂は最高だった。有難うございました。



芹田さん

西さん

坂田さん

一句選評

○坂田直彦 選

句碑の文字なれば古刹萩の声 河岸 佳子

「新し味は俳諧の華なり（芭蕉）」。長く俳句をしている（現代俳句協会の会員選挙に落選した経験がある）と、見たことのあるような句、類句、類想のある句が多いので困ってしまう。この吟行会でも、私の会でなら採らないような句が高得点になっていた。さて、句碑なら「読む」のが当たり前、「なぞる」もよくあると言える。「立つ」では当たり前すぎる、作者との関りもないことになる。「なぞれば古刹」のフレーズは少し気になった。大会句にあった「風さやか英字の句碑にぐっと寄る」（櫻打伸子）には少し新し味を感じた。

○森野 稔 選

鐘楼へ妻の背を押す萩の風 坂田 直彦

助詞の「へ」が効いている句。「へ」は目標・方向を示す働きをするので、鐘楼へ近寄ろうとする妻の動きが見えて来る。広い境内にあってなにか興味のあるものがあつたのだろう。日常の妻の状态からすこし歩行に危うさを感じていたのだが、折からの柔らかな萩を吹き抜けた風がまるで背中を押してくれているようだと感じた。着ているものの裾も翻っていて妻の満足した様子も見える。俳句の鑑賞は、そこまで良い。作者の愛情がそれとなく伝わるだけで良い。それ以上付け加えると俳句が重くなる。俳句鑑賞は薄味がよい。

○高田 実 選

秋草へ一歩踏み入る芭蕉の碑 細野 千里

今回の吟行地は、滑川市の芭蕉の句碑や旧街道を散策し句境に遊ぶ大会であった。芭蕉の句碑を題材に多くの句が投句されたが、景として詠む句と、触るなどなどの行いを詠む句の二種類があつたように思う。まず選句の基準として異論はあるが中七下五のしっかりしたもの。この地に来なければ詠めない句。詩情（余韻）と心の動きが見えるものを基準に選んだ。その意味で掲句は伸びた秋草の中へ踏み入るとの表現に、俳句への思いや俳聖への思いを端的に表し、余韻を残したかたちで読み手の心を遊ばせるという見事な表現力に感心し特選句とした。

現代俳句鑑賞(Ⅲ) 高橋 修宏

今回は、私より五歳以上年長にあたる、いわゆる団塊の世代を代表する二人の俳人を取り上げたい。大井恒行氏(一九四八年生、第80回現代俳句協会賞)と久保純夫氏(一九四九年生、第43回現代俳句協会賞)。二人共に現代における俳句表現の臨界を探索しつつ、歴史・社会性やラディカリズムを体現している俳句作品である。

ありがたき花鳥の道や核の塵 大井 恒行

無季俳句を含む『水月伝』一卷は、すぐれてアクチュアルな批評精神に貫かれている。だが、それは直截な社会批判などではない。なかでも一句は、大井の俳句表現の骨格を知るうえで欠かせない作品。

もちろん「花鳥の道」とは、かの高浜虚子が極楽の文芸と呼んだ花鳥調詠のこと。その背後には、〈地獄〉の裏付けがあると虚子は説いたが、周到にも彼は〈地獄〉それ自体を指し示すことも詠むことも避け続けてきた。この一句において大井は、その先にある〈地獄〉の実相をリアルに露呈させようとしている。「あ

りがたき」という痛烈なアイロニーと、いま取り合わされた「核の塵」――。永久に消えがたい爪痕を

刻み、また未来への負債となり続ける「核の塵」は、まさにわれわれが忘却しがちな、いや忘却しておきたい〈地獄〉そのもの。この異和をはらんだ取り合

わせによって、守旧的な俳句意識を蝕む鈍感さ、さらに無思想性さえも鋭く問いなおしているのだ。

出典：大井恒行『水月伝』(ふらんす堂)

麦踏みと天皇制が立ち上がり 久保 純夫

冬から早春にかけての単調な麦踏み作業は、千年余りにわたって続けられてきた農村の風景。それは、農業国としての日本の、ひとつの象徴とも言えるだろう。そんな、どこか懐かしさを伴った「麦踏み」と、一見唐突にも見える「天皇制」の取り合わせ。そのとき、「麦踏み」のもつ懐かしさやノスタルジーといったイメージは、ゆっくりと暗転してゆき、その深層に隠されていたもう一つの原因風景を見せつけるのだ。「麦踏み」という延々とくり返し続けられてきた単調な作業、その中に秘められてきたすめらみこと――。どのように拒否しても、呼吸する空気のように、私たちの周りを覆いつくし、満たし、そして意識できぬまま支配してしまうもの。そのような、ひとつの〈自然〉であるかのように存在してしまっているものにこそ、日本という国の隠然とした権威の本質があることを、この一句は静かに示唆しているのではないだろうか。

出典：久保純夫句集『熊野集』(弘栄堂書店)

事務局便り

I 監査会・役員会(二月)

期 日 令和八年二月十一日(水)祝

十一時〜監査会・十三時〜役員会

場 所 富山県教育文化会館五〇三号室

議 題 監査会…令和七年度会計監査

役員会…定期総会・春季俳句大会等

※ 欠席の場合は二月八日まで、吉田へ連絡のこと
II 定期総会・春季俳句大会

期 日 令和八年三月二十九日(日)

十三時〜定期総会・十四時〜春季俳句大会
会 場 富山県教育文化会館五〇一号室

投 句 同封のハガキにて一句を投句のこと

当日、第五回富山県現代俳句協会賞の
発表と授賞式も行う

※ 県協会の年会費(二千円)を受付で承ります
結社ごとにとまとめたの支払いを希望します

結社・句会だより (あいうえお順)

「豈」

◇俳句空間「豈」第六八号

高橋修宏は、多行形式の作品「奇乃島記」二十句を発表。

照葉樹／蒼き／素足の／弁財天 高橋 修宏

◇高橋の著書『暗闇の眼玉』(ふらんす堂)を林桂氏が書評。

◇また、同書により第二十七回小野十三郎賞を受賞
「海原富山支部」

◇金子兜太師系月刊俳句誌「海原」へ毎月五句投稿
二〇二五年九月号より

春曙春の蛇きれいな顔もてり 白井 重之
蜚鳥賊喰べては灯す喉仏 扇谷千恵子
白山をおさがしですかと花の山 高尾 久子
リラの冷え飯噴けば鳥のくぐもり 小池 弘子

「寒潮」

現代俳句誌 寒潮 三三九号〜三四一号 発行

寒潮結社内の「大沢野俳句会」の七名が当地にある「ゆゝとりあ越中」のロビーにおいて、

九月の一ヶ月間、作品展示会を開催しました。

秋澄めり天変地異は他人事 二口わこう

熟年は華やぐ 齢百 日紅 小田 昇

「喜見城」

俳誌「喜見城」八九八号〜九〇〇号発行

九〇〇号祝ふと湧きて雲の峰 川上 弥生

令和七年同人会を開催。日時：六月十五日（日）

場所：新川文化ホール 参加者十六名

同会での県協会員の入選句は次のとおり

田に入れる水の勢ひ夏来る 中田 広美

嫁と剥く豌豆の青弾け合ふ 石田 英子

ひとり居の午後のいねむり新樹光 宮崎あつ子

麦秋や今もどこかで戦あり 下野マサ子

「峡谷」

峡谷三十二周年記念俳句大会

日時 令和七年六月十三日

場所 宇奈月交流センター

天位 柿若葉平和と戦争裏表 吉田 憲子

地位 黄金に埋もるる部落麦の秋 谷 和夫

人位 廃校が曲がる目印わらび山 吉田 憲子

風薫る俳句と出会ひ八十路越え 板倉 捷子

抱卵の燕と話す朝の車庫 鹿熊 紀子

一步前へ踏み出す勇氣五月来る 中 静子

「高志俳句会」

俳誌「高志」五四一号〜五四五号発行

「高志」文化祭俳句大会

令和七年十一月一日水見市芸術文化館

参加者二十二名 不在出句十九名

次のベンチへ夫の肩借る紅葉山 小林ふさ子

一竿は赤子ののにおい文化の日 宮西 昌子

紅葉挟んだページYという符丁 坂田 直彦

紫蘇の実を扱く五七五のできるまで 坂田 紀枝

掲示板に「第九の誘い」冬に入る 馬場 晶子

「草樹」とやま草樹句会

◇会報 二二七号〜二三三号発行 月一回の句会を

継続

学校の鏡の中の夏休 飯干ゆかり

残心を解いて置く弓涼新た 吉田 久夫

秋澄むや茶碗の内の薄き罅 龜谷 正恵

柚子絞る碗の温もり夕餉の灯 兒堂 衣代

◇「草樹」創刊二十周年記念大会 十一月 大阪市

大会賞

消すほどもなく送火の尽きにけり 森川 敬三

「岳」北陸支部

◇毎月第一水曜日、定例俳句会と選評と講評

◇第二水曜日「岳」誌への投句のための指導句会を

開催。十一月以降井波町の東別院瑞泉寺下の駐車

場「交通広場」にて会員の俳句を展示。

十月定例俳句会

燕去り己が心のすかすかす 久保美智子

自然薯掘る化石発掘するように 幹 自聲

秋風や街が消えゆく重機音 木澤つとむ

「福田俳句会」

◇毎月第一日曜日に句会開催

◇元玄鳥俳句会会員の俳句教室 十月五日

ウイングウイング高岡にて 投句者十七名

鬼瓦の百年の黙昼の月 跡治 順子

闇もまた舞台となりて風の盆 山岡ゆう子

魯田をバス停二つ今日の旅 高島 詩香

角取れし竹の物差し秋日和 西 和美

稲架掛けて湯殿に時を惜しまざる 久保 俊一

虫の闇この世にひとりいるような 吉塚三津枝

「みのり俳句会」

◇十月定例句会 十月二十三日（木）会員十六名

兼題（平成）一句、自由題句三句 計六十四句の

作品が寄せられた。

鬼灯をホという口で鳴らしけり 佐伯 和子

老齡の十指健やか大根蒔く 谷口 智子

沢山の天使舞い降り蕎麦の花 芹田きみ子

◇定例句会 月一回

◇十一月二十日 吟行句会

県森林研究所樹木園（立山町吉峰開）

「森」

◇結社誌「森」は本年十月で創刊十五周年を貫徹し

た。それを寿ぐ年次大会を「森」のルーツである

糸魚川市から朝日町を辿る吟行俳句大会として開

催。あいにくの雨降りて親不知に降り立った時は

土砂降り。次の吟行地の山姥の伝説で知られる上

路集落も傘を手放せない天候だった。それでも県

境を越えて最後の吟行地の朝日町ヒスイ海岸に到

着したら、俄かに晴れてヒスイテラスで海を彩る

秋没日を心ゆくまで満喫することができた素晴ら

しい吟行だった。

天嶮をかけのぼりくる秋怒濤 古澤 桃

くつがえる波の色見よ秋没日 森野 稔